

時事小説『征播奏捷伝通俗演義』の成立とその背景

——もう一つの「楊家将」物語

松浦智子

一、はじめに

明の万曆三十一年（一六〇三）、金陵の佳麗書林から『征播奏捷伝通俗演義』¹（以下『征播奏捷伝』と表記）という小説が刊行された。棲真齋名衡逸狂こと玄真子なる者により編まれたこの作品は、万曆二十八年（一六〇〇）に官軍によつて平定された播州の「楊応龍の乱」²を題材にあつかう。この小説は、全六巻百回の紙幅をとり、南京刊の小説に特徴的な徽派の精緻な双面連式の大図を三十一枚も含む大部な作品であるにもかかわらず、乱の収束よりわずか三年という短期間で上梓されていることを大きな特徴とする。つまり『征播奏捷伝』は、三年前の出来事という時事題材を扱う時事小説となっているのである。

明末の天啓、崇禎年間にかけて、後金の遼東侵入、白蓮教の叛乱、魏忠賢の悪行、遼東戦争などの時事題材をあつかう小説が、題材とする事態の収束から早いもので数カ月、遅いものでも二年という短

い時間差で次々と刊行されるが、『征播奏捷伝』は、こうした一連の時事小説のなかでも現存最古の作品という重要な位置をしめている。では、天啓、崇禎年間に刊行された諸時事小説に先駆けて、なぜ万曆後期という時期に「楊応龍の乱」を題材とした時事小説が生まれたのか。乱の平定から三年という早さでこの小説が刊行された背景には、万曆後期の如何なる社会、時代、文化背景があり、そこにはどのような意味があつたのか。そして、『征播奏捷伝』の速成を可能にした編集方法とは如何なるものであつたのか。

本稿では『征播奏捷伝』に関わる以上の諸点を検討することにより、ひいては明末という時期に、時事小説が大量に産出されたという事象のうらにひそむエネルギーの一端について考えてみたい。

二、「楊応龍の乱」に関する記述と作品

まず、『征播奏捷伝』が題材にとる「楊応龍の乱」の流れを簡単に見てみる。

唐代より四川と貴州を結ぶ要害の地、播州を根拠地とする楊氏は、歴代王朝から播州一帯の支配権を委ねられてきた有力土司の家柄であった。明の隆慶六年（一五七二）、楊応龍は宣慰使の職を継ぐと、勢力拡大を目論み在地勢力と敵対関係となり、弾劾にあう。応龍はこれを契機に治下の苗族を率い、明朝に反旗を翻した（万曆二十四年（一五九六）頃）。当初明朝の対応は不十分なものであったが、万曆二十七年（一五九九）より、李化龍や郭子章を起用し本格的な鎮圧を開始した。それにより、翌万曆二十八年（一六〇〇）六月、海龍囤に追いつめられた楊応龍は自縊をし、ここに乱は終結した。これが「楊応龍の乱」の大まかな経緯である。

このように、長期にわたって播州を騒がせた「楊応龍の乱」に対する当時の人々の関心は薄からぬものであったとみえ、「楊応龍の乱」という「時事」について述べる書物が、乱の平定直後から次々と出現した。

中でも一番多く見られるのが、やはり乱の討伐参加者やその周囲の人物が、乱の経過を纏めた「実録」的なものである。書物の形で現存するものでは、万曆二十八年以降の鎮庄軍の詳細な軍行を時系列に並べて記述した無名氏『平播日録』（万曆二十八年十月の後記あり）、鎮庄軍の統帥である李化龍が上奏や軍令を集めた『平播全書』十五卷（万曆二十九年序）⁸、万曆中の諸兵乱とならんで楊応龍の乱の経過を記す諸葛元声『兩朝平攘録』卷五（万曆三十四年序）⁹などがある。また、『四庫全書総目』卷五四「雜史類存目三」には、李化

龍とともに鎮庄軍を統帥した貴州巡撫の郭子章の『平播始末』二卷が、『千頃堂書目』卷五「別史類」には、この郭子章の『平播始末』¹⁰に並んで、監軍按察使として従軍した楊寅秋の『平播録』五卷、四川左布政の職にあり従軍者と関係があったと考えられる程正誼の『播酋始末』¹¹、鍾奇の『播事述』一卷など、「楊応龍の乱」平定に関する複数の佚書の題名が記載されている。これらの佚書の内容は不明であるが、ともに、書目の「雜史」や「別史」の項目に分類されていることから、やはり「実録」的な性格をもつ書であったと考えられる。また、従軍者かその近者の手になる事を鑑みれば、その成立年代も、乱の平定からそれほど時差のあるものでなかったと推測されるのである。

このように、乱の平定直後より「実録」的性格をもつ書が次々と上梓されていたのだが、こうした「実録」書の一である郭子章『平播始末』について記した『四庫全書総目』卷五四「雜史類存目三」に、以下のような興味深い記述が残されているのである。

…萬曆間、播州宣慰使楊應龍叛、（郭）子章方巡撫貴州、被命與李化龍同討平之。化龍有『平播全書』、備錄前後進勦機宜。子章亦嘗有『黔記』頗載其事。晚年退休家居、聞一二武弁造作平話、左袒化龍、飾張功績、多乖事實（晩年に官職を退いて家居していたおり、一、二の武將がつくった「平話」を耳にしたが、その内容は李化龍に左袒し、功績を誇張しており、事実と大きく乖離するものであった）。乃倣紀

事本末之例、以諸奏疏稍加詮次、復爲此書、以辨其誣。(カッコ内訳、補注および傍線、松浦。以下同じ)

これによれば、郭子章は晩年に、数人の武將がつくった「平話」を聞く事があり、その内容が鎮圧軍の総帥である李化龍に左袒して功績を飾り立て、事実と乖離するものであったので、「平話」の内容の「誣」であることを告発するために、紀事本末体にのっとり「平播始末」を成したというのである。⁽¹³⁾ 郭子章の卒年は万曆四十六年(一六一八)であるため、この「平話」は少なくとも万曆四十年代の始め、早ければ万曆三十年代に出来ていた可能性が高い。

また、清の俞樾『九九銷夏錄』巻一二は、『四庫全書総目』のこの記述とはほぼ同じ内容を述べてから、「ここから、明人が楊応龍の乱という「時事」を「平話」化していたことが分かる」と指摘している。⁽¹⁴⁾ つまり、これらの記述によれば、「実録」的な軍令・上奏文集や、雑史、別史などが多く上梓される流れの中で、乱の平定までの過程を、武將の功績を虚飾して伝える「平話」のような娯楽作品が生み出されてきたということが指摘できるだろう。そして当時、こうした劇的な潤色を加えて、武將の功績を称賛する娯楽作品は、この「平話」以外にも存在していたのである。

明の沈德符『顧曲雜言』『張伯起伝奇』の項には、

張伯起(張鳳翼)少年作『紅拂記』。…(中略)…暮年、值播事奏

功大將楚人李應祥者、求作傳奇、以修其勲(播州平定にあたり功績を挙げた大將で、楚人の李應祥という者は、張鳳翼に求めて伝奇を作らせ、自分の勲章を誇張させた)。潤筆稍溢、不免過於張大似多、此一段蛇足。其曲今亦不行。…

との記述があり、「楊応龍の乱」平定に功績のあった貴州総兵官の李應祥⁽¹⁵⁾が、自己の功績を宣伝せんがため、晩年の張鳳翼に托して「伝奇」を作らせ、その内容は潤色が多く、大いに誇張されていた、というのである。これは、『伝奇彙考標目』の「張鳳翼」の項に並べられる作品名の中に、『平播』伝奇という題目がみえ、その後ろに「總兵李應祥厚禮求、事頗不實(総兵の李應祥は厚礼をもって張鳳翼に伝奇を作ることを求め、その内容は事実と頗る異なるものであった。)」という解説がついていることから裏付けられる。張鳳翼の卒年は万曆四十年(一六一三)年であることから、この「平播」伝奇は万曆三十年代には作られていたと考えられ、その時期は、『征播奏捷伝』が万曆三十一年に作られていた時期とちょうど符合する。

ここで再度「楊応龍の乱」という「時事」に関する書物や作品出現の流れを大まかに整理すると、――まず、乱の平定直後から、「実録」的な書物が次々と上梓され、それに少し遅れて、郭子章が耳にした「平話」や、李應祥が張鳳翼に作らせた「平播」伝奇といった、「実録」的内容に劇的な潤色を加えた娯楽作品が相次いで作られる。そして、その虚構性に反発して、郭子章の「平播始末」のような

「実録」的な史書が再び登場してくる——、という緩やかな流れが存在していたと読みとれよう。

そして、こうした流れが存在する中で注目されるのが、「平話」や『平播』伝奇が世にでた時期が、『征播奏捷伝』が刊行された時期とほぼ同時期であるということである。

ここでまず『征播奏捷伝』の引言と木記に記される、編集方法を見てみると、引言には、

…玄真子性敏好學、…（中略）…筆下偶出、庚子征播西楊應龍事跡始末、輯成一帙、額曰『征播奏捷傳』、屬予（九一居主人）序。

予公餘游閑、觀其言事論畧、皆有根由、實跡悉同、蜀院發刊『平播事畧』、並秋淵野人『平西凱歌』、道聰山人『平播集』等書中來（玄真子の『征播奏捷伝』の述べる内容や論旨を見るに、皆基づく所があり、歴史的事実はみな■蜀院発刊の『平播事畧』や、秋淵野人の『平西凱歌』、道聰山人の『平播集』等の書籍の中からとられている）。…（■文字は判読不能、〔西〕字か）

とあり、また書末に付された木記には

西蜀省院刊有『平播事畧』（西蜀省院刊行のものに『平播事畧』があった）、備載勅奏文表、風示天下。道聰子紀其耳聆目矚事之顛末、積成一帙、梓行坊中。倂因合二書之所述事蹟、敷演其義、而以通俗命名、令人

之易曉也（道聰子は聞いたり見たりした事の顛末を記し、一帙の書にまとめ、坊中で刊行した。本書『征播奏捷伝』は『平播事畧』と道聰子刊行の書の二書が述べる事跡を巧みに合わせ、その内容を敷衍し、通俗化して名前をつけ、人々に分かりやすく提供したものである）。

とある。

以上の記述によれば、『征播奏捷伝』は成書の際に『平播事畧』や『平播集』『平西凱歌』といった書物を引用したということになる。これらの書物は佚書となつているため、その詳細な内容は判じかねるが、西蜀省院発刊の『平播事畧』は、「勅奏文表」を記載していることや官板とみられることから、李化龍『平播全書』と同様の性格をもつ書であつたであろうし、道聰山人こと道聰子の坊刻本『平播集』は、引言と木記の記述から、先に挙げた「実録」的性格をもつ雑史に類する書物であつたと考えられる。従つて、『征播奏捷伝』は、先行する「実録」的書物の事跡を基本的な骨格とし、そこに劇的な潤色を加えて作られた作品¹⁸⁾であるということになるだろう。そうであるならば、『征播奏捷伝』は、「平話」や『平播』伝奇が「実録」的書物に少し遅れて登場してきたのと同じ流れの中から出現した小説であつたという事が指摘できるのではないだろうか。

では、「楊応龍の乱」の直後から、この兵変に関する数多くの「実録」的書物が出現し、それに少し遅れて「平話」や『平播』伝奇、『征播奏捷伝』のような潤色が施された娯楽作品が出現したという、

いわば「楊応龍の乱」という「時事」に対する旺盛な関心と、その「時事」に対する活発なる「言論化」ともいふべき現象が生じた背後には、一体どのようなエネルギーがひそんでいたのだろうか。

三、「時事」と「楊応龍の乱」に対する関心

「楊応龍の乱」は、万曆二十年（一五九二）の寧夏ボハイの乱、万曆二十年、二十五年（一五九七）と二次にわたる朝鮮の役とともに、「万曆の三大征」に数えられている。

時おりしも万曆中後期、明朝の財政は宮廷で行われていた奢侈生活により逼迫していたが、三つの兵変を平定するために、明朝は、一八〇余万両、七八〇余万両、二〇〇余万両という多額の軍事費の支出を余儀なくされた。¹⁹更に、万曆二十五年に京師の三殿が焼失したことにより始まった「採木の役」なども重なり、明朝の歳出は歳入をはるかに超え、財政は窮乏を極めた。そこで、財政を補填すべく提言されたのが、鉅山の開発と商税の増徴であり、万曆二十四年以降、宦官が監税官として全国各地に派遣された。これらの宦官たちは、開鉅や商税を名目に、無頼の徒を用いて民財を収奪し苛斂誅求をおこない、これにより、所謂「鉅税の害」が各地にひろまっていた。

こうした宦官達による「鉅税の害」の拡大に対し、万曆中後期、天啓、崇禎の期間にかけて、各地でこれに抵抗する民変が多発した

ことは周知の通りである。試みに、時期を、楊応龍の反目が明らかになった万曆二十五年以降から、『征播奏捷伝』が上梓された万曆三十一年までに絞ってみても、——万曆二十五年（一五九七）…瓜州、万曆二十七年（一五九九）…臨清、儀真、万曆二十八年（一六〇〇）…通州、広東、万曆二十九年（一六〇二）…蘇州、湘潭、宝慶、襄陽、光化、万曆三十年（一六〇二）…蘇州、景德鎮、上饒、万曆三十一年（一六〇三）…常熟、上饒、北京²⁰——と、非常に多くの民変が発生しており、特に、その発生地点の大半が江南を中心とした南方に集中していたことがわかる。

つまり、万曆二十五年前後に播州で発生した「楊応龍の乱」が、万曆二十八年に平定され、さらに万曆三十一年に乱を題材とした小説が南京で出版されていたこの時期、『征播奏捷伝』が刊行された江南地域では、宦官や、酷吏によりもたらされた苛烈な事態という「時事」に対する高度な関心が存在しており、こうした「時事」に敏感に反応した人々が結集し、民変が繰り返されるという騒然とした社会情勢が形成されていたのである。

そして、「時事」に対して敏感であった当時の江南の人々が、「楊応龍の乱」という「時事」に関心を寄せたのには、上記のような当時の不安定な社会的背景から生み出された原因の他に、もう一つ個別的な原因があったと考えられる。それは、楊応龍の率いる播州楊氏と、当時江南地域で絶大なる人気を誇っていた「楊家将演義」の

山西太原の楊氏が族譜を通じていたということである。叛乱を引き起こした楊応龍は、「楊家將」の末裔として捉えられていたらしいのである。

明初の宋濂の記した「楊氏家伝」の記述によれば、播州楊氏は、山西太原の楊氏の楊端が唐末に播州に移住したことに始まり、のち、五代目の楊昭に後継ぎがいなかったため、再び太原楊氏の楊充広の子、貴遷を後継ぎとして迎えたという。そして、この楊充広こそが、「楊家將」で有名な楊業の孫にして、楊延昭（旧名は延郎、「楊家將」の楊六郎）の子供であり、以後、播州楊氏の長は楊業の子孫が世襲することとなった。さらに、貴遷の孫の名は、「楊家將」で活躍するあの楊文広と同名の「楊文広」だというのである。²¹

播州の楊氏が、「楊家將」と族譜を通じているとの説は、「楊応龍の乱」以前からかなり流布していたらしい。王世貞の『宛委餘編』巻六では「市巷人俚歌稱、楊業之子曰楊六郎延昭、延昭之子宗保、宗保之子文廣、征南陷南中。其事多誣罔。（市巷の人の俚歌では、楊業の子は楊六郎延昭、延昭の子は宗保、宗保の子は文広であると言ひ、文広は征南して南方で陣没したとうたう。これは酷いデタラメである。）」²²として、王世貞の生きた嘉靖当時の「俚歌」では、楊文広が征南して陣没するというデタラメが唱われていると述べる。そしてその後に、上述の宋濂の「楊氏家伝」の記事を引いて、播州の楊氏と、「楊家將」の楊氏の関係を述べ、貴遷の孫が文広という名前であることを指摘しながら、楊文広が「南中に陥」ったという話が、ここから来たこ

とを示唆しているのである。

さらに、「楊応龍の乱」平定後間もないころに鎮圧軍統帥の郭子章よって記された『黔記』巻五十七「故宣慰列伝・播州楊氏」にも、『宛委餘編』のこの記事が引用されており、播州の楊氏と山西楊氏の関係が論じられているのである。²³となれば、『征播奏捷伝』が刊行された前後の時期、郭子章がその関係を論に持ち出すほど、楊応龍ひきいる播州楊氏が「楊家將」の末裔であるとの説が広汎に流布していたということになるだろう。²⁴

そのため、「楊応龍の乱」平定後の南方地域には、あの「楊家將」の末裔である楊応龍が引き起こした叛乱の顛末を知りたい、という高い関心とエネルギーが存在していただろうことが推測され、それが、「楊応龍の乱」に関する一群の「実録」的書物や創作作品を登場させる一つの心理的原動力となっていたと考えられるのである。そして実際、その証左となる記述が『征播奏捷伝』にみえるのである。

『征播奏捷伝』巻二第十七〜八回には、明朝に叛逆する以前の楊応龍と官軍の劉綎兵がともに、柳州城で叛乱をおこした曹倫を平定する話が描かれているが、その中で、「柳州城」という語に対して、「宋楊文廣征蛮、曾陷入此城、後得妹宜娘用計救出。此載『征蛮傳』（宋の楊文広が蛮族を攻略した時、曾てこの城で危機に陥った。後に妹の宜娘が計を用いて救出した。この事は『征蛮傳』に載っている。）²⁵という、「楊家將」に関する注が施されているのである。楊文広が柳州城において宜娘に救出される話は、万曆三十四年に刊行された小説『楊家府

世代忠勇通俗演義伝』巻七第二則にも見え、『征播奏捷伝』が万曆三十一年に成立した当時、巷間で人気を博していた話柄であったと考えられる²³。であるならば、播州楊氏の楊文広と同名の、「楊家将」楊文広の人気話柄を作中で提示することで、『征播奏捷伝』は、楊応龍が「楊家将」と関係をもっていたことを意図的に印象づけようとしていたと読み取ることができるだろう。

以上の推論が正しければ、騒然とした社会情勢を背景に「時事」への普遍的な関心の高さが存在していた事に加えて、「楊家将」の末裔に対する個別的な関心が存在したことで、とくに民変が多発し楊家将人気の高い江南地域において、「楊応龍の乱」という「時事」に対して人々がもつ関心が、より凝集していったということになるだろう。

そして当時の江南には、人々のこうした「時事」に対する旺盛な関心を、『征播奏捷伝』のような具体的な作品として結晶させ、「言論化」させるエネルギーが一つの背景として存在していた。それは、とくに明末の民変において、不特定多数の人間を結集させ煽動する用具となった、多種の大衆メディアを用いた宣伝活動である。

四、「時事」の言論化と大衆メディア

明末に多発した民変に関しては、たびたびその群衆行動の熱狂性が指摘されているが、そこには熱狂性のもとに、不特定多数の人々

が、士や民といった縦の階層をこえて、水平方向に拡大しながら広汎に結集するという特徴がみられる。

岸本美緒氏は「明末清初の地方社会と『世論』」²⁴において、明末民変の形態的特徴として、——政治社会問題を契機とする民変でも、問題が宦官、地方官、郷紳といった地方社会の顕揚人物の徳性の問題に読みかえられ、民衆はそれを、善あるいは悪のシンボルとして結晶化させて標的にする——²⁵、という側面があったことを指摘する。いま、岸本氏のこの指摘をふまえて考えるならば、複雑な要素のまじった政治問題を契機とする民変においても、不特定多数の人間が結集しえたのには、問題を「善あるいは悪のシンボルとして結晶化」させ、標的を単純化させた事に一因があったと把握できよう。そして、民衆の脳裏で行われるこうした作業に影響を与えたと考えられるのが、大衆メディアとしての機能をもつ戯劇や俗曲といった口頭芸能や、戯劇を文字化したもの、小説、ビラ、貼り紙などの出版印刷物である。

例えば、万曆二十一年（一五九三）におきた「松江知府李多見留任運動」では、まず好事者が「保留文榜」なるものを印刷し各処にはり、それを受けて三県の士民たちがそれぞれビラを書いて役所や盛り場などにはった。これにより役所の前には毎日一万あまりの群衆が集い、李多見の留任を嘆願する激しさは軍隊が出動するほどであったという²⁶。

また、万曆二十九年に蘇州でおきた「織傭の変」は、宦官孫隆と

その部下黄建節が、織機織布に酷税を課そうとしたのを引き金に、民衆が黄建節を殺し、孫・黄とつうじて過酷な収税をおこなっていた郷紳の丁元復の邸を焼きはらった事件であるが、ある読書人はこの暴動を戯曲化して「蕉扇記」なる作品を書き、郷紳丁元復を諷刺したという。²⁹

さらに、万暦四十四年に松江でおきた「反董其昌民変」³⁰は、生員陸紹芳の使用人の娘を、郷紳の董其昌が強奪したことに端を発するが、この事件はまず好事者が『黑白伝』なる章回小説を成し、さらに『醜罵曲本』なる俗曲が流布したことにより一般に広く伝わった。³¹

これに怒った董其昌は、「説書人の銭」³²を捕らえ、生員の范昶の名を犯人として聞き出しこれを喚問し、范は死んでしまう。そして事を知った人々が憤激のあまり大群衆となつて董家を取り囲み、事態は焼きうちまでに発展したという。この大群衆が集められる過程において、非識字層に対しては「若要柴米強、先殺董其昌（たきぎや米が十分に欲しければ、まず董其昌を殺せ）」という謡が流され、識字層に対しては「獸宦董其昌、梟孽董祖常」というが貼り紙がはり出され、さらに客商や娼妓、芸人、船頭にまでもビラが配られ、「反董其昌」の宣伝がなされたというのである。³³

このように、江南各地を中心に多発していた民変では、戯劇や俗曲といった口頭芸能や、ビラ、貼り紙、小説などの出版印刷物といった多種の大衆メディアを通して、即時に情報伝わり言論が形成されていた。とりわけ、戯劇や俗曲、小説などは、現実に起きた事

柄を、劇的效果をねらいながら娯楽化して伝える機能をもつことから、人心を煽る作用をもっていたことは言うまでもなく、それがゆえに、人々の意識の中で標的となるべき対象が純化されやすくなり、民変は熱狂性をおび拡大していった側面があったといえよう。

そして、ここで視点を『征播奏捷伝』成立の背景にもどせば、「楊応龍の乱」への関心が高まっていた時期、『征播奏捷伝』が刊行された江南地域には、「時事」に即応し、メディア機能をになった戯劇や小説などが生み出されるエネルギーや条件がそろっていたといえるだろう。

すなわち、人々の高い関心を集めていた「楊応龍の乱」という「時事」を扱った「平話」や「平播」伝奇、そして『征播奏捷伝』も、当時江南に地域に存在した多種の大衆メディアをととして「時事」を言論化し情報伝達をせんとする、巨大なエネルギーに押されて刊行されたものであったと把握できるのである。

実際、『征播奏捷伝』の本記には、この小説の出版意図に、史書や野史といった「実録」書を敷衍、通俗化して、人々に分かりやすく「楊応龍の乱」の顛末を知らしめる、という情報伝達の意図と、「彰善殛惡（善を賞揚し、悪を打倒）」し、明朝の国威を塞外にしらしめ、二度と「土酋」が叛逆をおこさないように本を出版した、という教育的な言論形成の意図³⁴があった事が記されているのである。

このように、万暦後期の江南社会にみえる「時事」の言論化と情報伝達を求めるうねりを一つの大きな背景として出現した『征播奏

捷伝』であるが、その本記が述べるように、「実録」書の事跡を通俗化して「時事」の情報伝達を実現する、つまり今のニュースのような役割を実現するためには、「楊応龍の乱」の収束からいかに早くこの書を刊行して人々に提供するかが問題になってくる。そして実際に、『征播奏捷伝』は、乱の収束後三年という短期間での編集出版を実現しているのである。

では、『征播奏捷伝』が速成をなしたのは、如何なる編集法、構成法に支えられての事だったのか。

五、『征播奏捷伝』の編集方法

『征播奏捷伝』の刊行された万暦後期は、江南の出版業界にとって一つの大きな画期にあたる。明中期の嘉靖頃から隆盛を迎えた中国の出版活動は、万暦以後、経済的繁栄を大きな背景として特に江南地域において空前の活況を呈し、書物の流通量も格段に増加していた。³⁵

こうした万暦江南の出版活動の隆盛の一端を支えた代表的な出版人に、松江華亭の陳繼儒（一五五八—一六三九）という人物がいた。そして、彼の出版活動について記した錢謙益の『列朝詩集』丁集下「陳徵士繼儒」には、『征播奏捷伝』のといった編集方針を探るのに重要な手がかりとなる記述が残っているのである。曰く、

仲醇（陳繼儒）、又能延招吳越間窮儒老宿隱約飢寒者、使之尋章摘

句、族分部居、刺取其瑣言僻事、薈叢成書、流傳遠邇。（陳繼儒は江南地方の貧乏儒者や年老いた僧侶道士で食い詰めたものを雇い、章節や語句を取り出させ、それを分類し、些細な話や珍しい事柄などを取ってきて、それらをかき集めて本を作り流通させていた。）

陳繼儒が、江南の貧乏読書人に、色々な書物の文章を切り貼りさせるという方法で大量の書物を刊行していた時期は、ちょうど『征播奏捷伝』が出版された万暦三十年代とも重なる。そして万暦後期のこの時期にかつて無いほど大量の書物が刊行されていた事を鑑みれば、こうした切り貼という方法を用いて安価かつ簡単に書物を速成していたのは、恐らく陳繼儒だけでなかったであろうことは容易に察せられよう。

先にもふれたように（第二節）、『征播奏捷伝』は『平播事畧』『平播集』などの「実録」的な史書、野史の事跡を基本的な骨格とし、そこに劇的な潤色を加えて作られた作品である。そして、『征播奏捷伝』の編者は潤色を行うにあたって、陳繼儒の用いた切り貼りの手法と同じく、『水滸伝』、『英烈伝』、『西遊記』、『三宝太監西洋記』などの諸小説から、物語の情景描写を行う詩詞・駢語を剽窃に近い形で大量に借用して編集を行っていたのである。

例えば、『征播奏捷伝』第十九～二十回における借用の状況をみてみよう。³⁶

この回は楊応龍の妾の田玉娥が族兄の田禾盛と密通した上に、正

妻の張氏に密通の濡れ衣を着せて、張氏を青蓮莊へと放逐するまでの情節が描かれている。妾の田氏の密通疑惑は『兩朝平攘録』などの「実録」書にも書かれるものであるが、『征播奏捷伝』はこの「史実」を敷衍、通俗化する際に、『水滸伝』第二十四回に描かれる西門慶と潘金蓮の逢い引きの場面に使われる駢語を以下のように借用している。

『征播』…交頸鴛鴦戲水、並頭鸞鳳穿花。喜孜孜連理枝生、美甘甘同心帶結。將朱脣緊貼、把粉面斜偎。羅襪高挑、肩膊上露一彎新月、金釧倒溜、枕頭邊堆一朵烏雲。恰恰鶯聲、不離耳畔。津津甜唾、口吐舌尖。楊柳腰脈脈春濃、櫻桃口呀呀氣喘。星眼朦朧、細細汗流香玉顆、酥胸蕩漾、涓涓露滴牡丹心。直饒匹配婚姻趣、真實偷情滋味濃。

『水滸』…交頸鴛鴦戲水、並頭鸞鳳穿花。喜孜孜連理枝生、美甘甘同心帶結。將朱脣緊貼、把粉面斜偎。羅襪高挑、肩膊上露一彎新月、金釧倒溜、枕頭邊堆一朵烏雲。誓海盟山、搏弄得千般旖旎、羞雲怯雨、揉搓的萬種妖嬈。恰恰鶯聲、不離耳畔。津津甜唾、笑吐舌尖。楊柳腰脈脈春濃、櫻桃口呀呀氣喘。星眼朦朧、細細汗流香玉顆、酥胸蕩漾、涓涓露滴牡丹心。直饒匹配婚姻偕、真實偷期滋味美。

また、田氏と族兄が密通に及ぶ前の場面には、夕闇逼る外の情景描写を行うために、『水滸伝』第八回で、林冲が滄州道に流配される

場面に用いられる夕景描写の駢語を以下のように借用し、

『征播』…紅輪低垂、玉鏡將明。遙觀樵子歸來、近觀柴門半掩。僧投古寺、疎林穰穰鴉飛、客歇孤村、斷岸嗷嗷犬吠。佳人秉燭歸房、漁人收綸罷釣。唧唧亂蛩鳴腐草、紛紛宿鷺下沙汀。

『水滸』…紅輪低墜、玉鏡將明。遙觀樵子歸來、近觀柴門半掩。僧投古寺、疎林穰穰鴉飛、客遶孤村、斷岸嗷嗷犬吠。佳人秉燭歸房、漁父收綸罷釣。唧唧亂蛩鳴腐草、紛紛宿鷺下沙汀。

さらに田氏に陥れられて青蓮莊へ放逐された正妻張氏が、我が身を嘆いている場面では、『水滸伝』第三回で、肉屋の鄭の妾になることを嘆き泣いていた金翠蓮が、魯智深らの前に登場した時に使われた駢語を借用しているのである。

『征播』…蛾眉緊蹙、汪汪淚眼落珍珠、粉面低垂、細細香肌消白雪。若非雨病雲愁、定是懷憂積恨。

『水滸』…蛾眉緊蹙、汪汪淚眼落珍珠、粉面低垂、細細香肌消玉雪。若非雨病雲愁、定是懷憂積恨。

こうした駢語や詩詞の借用数は、『水滸伝』から五十二、『英烈伝』から十八、『西遊記』と『三才圖會西洋記』からはそれぞれ六、と現在調べがついているだけでも合計で八十二という数に上っている。

さらに、『征播奏捷伝』が行った借用は、詩詞駢語だけにとどまらなかった。『征播奏捷伝』第五、六回に見える「張真人叩丹陛陳情」の挿絵は、『英烈伝』第三卷「高皇帝平定江西、花雲妾雙全節義」中の挿絵を、また、『征播奏捷伝』第九、十回に見える「楊應龍諧鸞鳳佳配」の挿絵は、『琵琶記』第十九齣「強就鸞鳳」中の挿絵を、そっくり引き写したものである。

かくのごとく、『征播奏捷伝』は、当時の江南出版業界でよく用いられていた切り貼りの手法を十二分に駆使することで、低コストかつ迅速な編集刊行を実現させていた。そして、速成を実現した『征播奏捷伝』は、「時事」情報を人々に提供するというニュース伝達の役割をも果たしていたと考えられるのである。

六、おわりに

以上、「楊応龍の乱」が起きた万暦後期の社会、時代背景、そして文化背景の検証を通して、現存最初期の時事小説『征播奏捷伝』が、乱の平定から三年という短期間で刊行された原動力の一端とその意味について考察をしてきた。

万暦後期という時代は、明清の王朝交替へと向かう秩序の変動期にさしかかっていた時代であり、在来の秩序崩壊の兆しを敏感に感じ取った人々が発する不安感が社会を包みはじめた先駆けの時代であった。そのため、人々は「時事」というものへ旺盛な関心を示し

はじめ、それが一面で、江南地域を中心に多発する民変という形で表出していた。

その一方でこの時代は、こうした不安感を抱えながらも、江南地域を中心に経済が曾て無いほどの繁栄を見せ、それを一つの背景として出版業界が空前の活況を見せていた時代でもあった。そして皮肉にも、こうした出版メディアは他の大衆メディアと俱に「時事」の言論化や情報伝達を促進する機能を果たし、各地で暴発した民変を煽動、拡大させる用具ともなっていたのである。つまり、万暦後期に生じた、「時事」に対する高度な関心というものは、こうしたものに強く裏付けされて生じたものだったともいえるだろう。

「楊応龍の乱」は、このような一見相反する要素が矛盾無く并在し、かつ循環した奇妙な時代に発生した。それが故に、「時事」に対する全体的な関心の高さという土台の上に、「楊家将」の末裔と見なされていた楊応龍に対する個別的な関心の高さが加わり、「楊応龍の乱」という「時事」への関心が凝集された。それが『征播奏捷伝』という作品を生み出すエネルギーへと転化していったと考えられるのである。そして、『征播奏捷伝』は、当時の出版業界でよく行われていた、切り貼り編集という書物の速成法を用いる事で、乱の収束から三年という短期間で刊行を実現し、「時事」を伝達する、ニュースとしての機能も果たすこととなったのである。

かくあるならば、『征播奏捷伝』は、万暦後期という明末にさしかかった変動期に生じた複雑な社会様相を、他の時事小説に先駆けて、

いち早く体现した作品として大きな意味を持っているといえるのではないだろうか。

付・本論文は、平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号196013)の交付を受けた研究成果の一部である。

注

(1) 『征播奏捷伝通俗演義』は、京都大学所蔵本と尊経閣所蔵本の二本のみ伝存する。本論では京大人文研がインターネット上で公開している京大本の写真を参考にしながら、京大本を影印した上海古籍出版社『古本小説集成』を主に使用した。

(2) この棲真齋名衛逸狂が誰かは不明であるが、『後叙』に「棲真齋玄真子誤」の署名があることから、引言に『征播奏捷伝』を編著したと書かれる「玄真子」と同一人物であることが分かる。

(3) 現在の貴州省遵義

(4) 六卷それぞれには、礼、楽、射、御、書、数が集の名前としてついている。また、百回という回数であるが、実際には二回で一回の形式になっており、小説の本文は全部で四十九回である。残る第九十九回と第百回にはそれぞれ、「逸狂賛頌平播詩」、「翰林川費用兵議」が記されている。

(5) 射集第三卷第三十一、三十二回に挟まれる「樊参将話無引私塩」挿絵の右半葉右肩上に、「汝南王臣会」との刻工名が見える。

(6) 陳大康『明代小説史』第五編(2)の所載の表参照。

(7) 『皇明脩文備史』(北京図書館古本珍本叢刊第八輯)所収。無名氏の著であるが、一日単位での詳細な軍行が書かれていることから、従軍者もしくはその近者の手になると考えられる。

(8) 『四庫全書存目叢書』史部雜史類五〇(中山図書館本影印)、及び『叢書集成新編』所収。李化龍は総督湖広川貴軍務兼巡撫四川として鎮圧軍

を率いた。

(9) 『明代史籍彙刊』所収、国立中央図書館蔵本影印『両朝平攘録』

(10) 『千頃堂書目』卷五「別史類」は、「郭子章」「黔中平播始末」「三卷」に作る。

(11) 『明史』二四七「劉綎伝」によれば、雲南の継栄が叛乱を起こした際、雲南巡撫の劉世曾は、雲南の監司であった程正誼と鄭璧に命じて、継栄らの反乱軍に当たらせ、同時に、解官されて霑益に来ていた劉綎をも用いて反乱軍を平定したという。この劉綎は、後に楊応龍討伐で功績を挙げた將軍であり、ここから、程正誼は、楊応龍討伐に従軍した一將であったか、少なくとも応龍討伐軍に従軍していた者達から詳しい情報を得られる立場にいた者であったと推測される。

(12) 鍾奇と『播事述』に関しては待考。

(13) 注6陳大康前掲書pp.63は、この「平話」が『征播奏捷伝』であると解釈する。しかし、『征播奏捷伝』では李化龍、郭子章両者の登場回数自体が非常に少ない上に、郭子章を称賛する語は見えるが、かえって「左祖化龍」をしている部分は見あたらないことから、『征播奏捷伝』とこの「平話」は同一書ではないと考えられる。

(14) 明萬曆間、播州宣慰使楊應龍叛、郭子章巡撫貴州、與李化龍同討平之。化龍時巡撫四川、進總督四川、湖廣、貴州軍務。事平、化龍有「平播全書」之作。其後一、二武弁造化平話、以播事全歸化龍一人之功。子章不平、作「平播始末」二卷以辨其誣。據此、知明人於時事亦有平話也。

(15) 『明史』二四七「李応祥伝」によれば、万曆二十八年に応龍討伐において失策をした貴州総兵官の童元鎮にかわり、李化龍の推挙で新たに貴州総兵官に充てられ、同年六月の海龍圍攻略において功績を挙げた武将。『征播奏捷伝』にもその名前が見える。

(16) この「平播」伝奇は、その内容が李応祥の功績を過度に称賛するものであるため、先に挙げた「平話」や、『征播奏捷伝』とも違った作品であることがわかる。

(17) 『征播奏捷伝』は、楊応龍の乱について報告する文表や、楊応龍が朝廷に奏上した表詞、捕縛された楊一族による供述などを掲載し、それを

『平播事畧』(一部『征播事畧』と表記)からの引用であると、双行小字注で明記する。一方、『古本小説集成』所収『征播奏捷伝通俗演義』の影印本に付される廖可斌の前言では、この『平播事畧』こそが、李化龍の『平播全書』であるとするが、『平播事畧』に載っている筈の、楊応龍の表詞や楊氏一族の供述が、李化龍の『平播全書』には見あたらない事から、『征播奏捷伝』が引用する『平播事畧』と李化龍『平播全書』は同一書ではないと考えられる。

(18) 『征播奏捷伝』の基本的な骨格は、史実を追うものであるが、方術を用いて霧をおこす虚構性に富んだ話や、応龍の妾田氏とその族兄の密通を潤色した娯楽性に富んだ話等が、随所に差し挟まれている。

(19) 『明史』一三五「王徳完伝」

(20) 田中正俊「民変・抗租奴変」(筑摩書房『世界の歴史』十一、一九六二)

(21) 『翰園別集』巻第一「楊氏家伝」…「貴遷太原人、與(楊)端爲同族。其父充廣、乃宋贈太師中書令業之曾孫、莫州刺史充本州防禦使延郎(延昭)之子。嘗持節廣西、與昭通譜。昭無子、充廣輟貴遷爲之後。自是守播者、皆業之子孫也。…(中略)…(貴遷)生三子、光震、光榮、光明。…(中略)…(光震)生五子、文廣、文眞、文錫、文貴、文宣。」「宋濂全集」所収

(22) 『黔記』巻五十七「故宣慰列伝・播州楊氏」(『北京圖書館古籍珍本叢書』史部、地理類、43)

(23) このほか、『蜀中広記』巻三十七、『万曆武功録』巻六「楊応龍伝下」、「西園見聞録」巻七十一などにも、この説の記載が見える。

(24) 万曆二十一年自序の劉元卿「賢奕編」巻三に、「沈屯子偕友入市、聽打談者說楊文廣圍困柳州城中。」とあり、万曆中後期の巷間で、楊文広が柳州城で囲まれる講談が語られていたと言及がある事も、その証左

となるだろう。

(25) 注20前掲田中論文や夫馬進訳注「『明末清初の都市暴動』」(『中国民衆叛乱史』4、一九八三)など。

(26) 岸本美緒「明清交替と江南社会」、一九九九。初出「歴史学研究」五七三号、一九八七。

(27) 以上は筆者による要約であり、原文そのままの引用ではないことをお断りしておく。

(28) 『雲間樵目抄』巻三「記祥異」

(29) 宋楹澄「九篇別集」(葛道人伝)

(30) 大木康「明末江南における出版文化の諸相—初期大衆伝達社会の成立」(同氏「明末江南の出版文化」、二〇〇四)の指摘におう。

(31) 曹家駒「説夢」、章有謨「景船齋雜記」巻下

(32) 『民抄童宦事実』「府学申覆理刑庁公文」、「十五十六民抄童宦事実」

(33) 倭因合「書之所述事蹟、敷演其義、而以通俗命名、令人之易曉也。即未必言言中竅、事事協眞、大抵皆彰善殛惡、非假設一種孟浪議論、以惑世誣民。盖期張天威于塞外、垂大戒于城中、擬奸魄、振士氣、使世之爲士酋者、不敢正視天朝、安常守職、無蹈前車之覆轍云耳。

(34) 井上進「書籍業界の新紀元」(同氏「中国出版文化史」、二〇〇二)、大木康「明末江南における書籍出版の状況」(注30前掲同氏著書)

(35) 『征播奏捷伝』がこうした切り貼り編集に際して、それぞれの小説のどの版を用いたかについて追求することは、本稿の直接の目的から外れるため、ここでは詳細には述べない。『征播奏捷伝』が編集の際に使用した版本の詳細な問題については別稿をもうけて改めて論ずる予定である。

(36) 『征播奏捷伝』がこうした切り貼り編集に際して、それぞれの小説のどの版を用いたかについて追求することは、本稿の直接の目的から外れるため、ここでは詳細には述べない。『征播奏捷伝』が編集の際に使用した版本の詳細な問題については別稿をもうけて改めて論ずる予定である。

(37) 『両朝平攘録』巻五の記述によれば、楊応龍が田氏の密通相手として疑ったのは、田氏の族兄ではなく、応龍の族弟である楊繼龍だったという。

(38) 字句調査の結果、『征播奏捷伝』が借用する『水滸伝』の詩詞駢語は、現存の諸版本のうち、容与堂本系統のものとの一致率が最も高かったた

め、以下『水滸伝』の詩詞駢語は『古本小説集成』所収の北京図書館蔵容与堂本から引用した。また、容与堂本の成立は万暦三十八年であるが、『征播奏捷伝』所引の詩詞駢語がこの系統との一致率が最も高いことから、『征播奏捷伝』が編まれた万暦三十一年には、容与堂本の前身に近い版本が存在していた事が想定される。

(39) 三台館『新刻皇明開運輯略武功名世英烈伝』六巻本の王少淮挿絵（本論では内閣文庫所蔵本を比較に用いた）

(40) 金陵繼志齋明万暦二十六年序刊重校『琵琶記』四巻四十二齣の汪耕挿絵（本論では内閣文庫所蔵本を比較に用いた）